



北方民族博物館だより

No.87



H12.2 ビーズ製モカシンの飾り 18.3×9.8cm 2枚
アサバスカ・インディアン 米国アラスカ・フォートユーコン

ヘラジカ皮革などで作られるスリッパ（モカシン）の甲の部分に使用する装飾パーツ。この資料は、伝統工芸品が分業生産される流れのなかで収集された。何人かが分担して各部品を作り、それを組み合わせて一つの伝統工芸品に仕上げる。部品を組み合わせて完成した製品は、都市の店舗で販売される。

目次 Contents

- 1 表紙 ビーズ製モカシンの飾り
- 2 第27回北方民族文化シンポジウム「環境変化と先住民の生業文化—海洋生態系における適応—」
- 5 講座「フィンランドにおけるサーミ文化の現状と博物館Ⅱ」／講座「地球温暖化とトナカイ牧畜民」
- 6 ロビー展「明治大学政治経済学部寄贈資料展～明治大学アラスカ遠征の記録～」
- 7 講座「日本人によるアラスカ発掘映像の記録」／調査報告「2012年度カムチャツカ調査」
- 8 INFORMATION

第27回北方民族文化シンポジウム

環境変化と先住民の生業文化

—海洋生態系における適応—

2012.10.13-10.14

会場 オホーツク・文化交流センター
(エコセンター2000)

今年度のシンポジウムでは、環境変化が北方先住民の生業文化、特に臨海域における海獣狩猟・漁撈・採集といった生業に及ぼす影響と先住民側の対応をテーマとし、2日間にわたって発表と討論を行いました。

以下にそれぞれの発表の概要を紹介します。

第1部：海洋生態系と北方民族

「北方冷水域における海洋生態系の特色と予想される温暖化の影響」

谷口 旭氏（東京農業大学生物産業学部）

北極を取り巻く極海域やオホーツク海、ベーリング海などの北方冷水域には、海洋植物の養分となる栄養塩が多い。冬には日照不足のため海洋植物の生産は低下するが、海表面冷却によって海水が上下混合し、下層から表層へと豊かな栄養塩を補給する。これによって春～秋に植物プランクトンが大繁殖するため、魚類、海獣類等の生産量は大きい。

浅い沿岸水域は、栄養塩が常に海底から補給されるので周年富栄養であり、光が海底まで届くので海藻や海草の生産量も大きい。その面積は狭い。北方冷水域全体としては、外洋に広がるプランクトン食物連鎖の割合が圧倒的に大きく、冬季の海水の上下混合が重要である。

地球温暖化は、日照には大きく影響しないが、冬季の海表面冷却を弱めるだろう。その結果、栄養塩の補給量は減り、北方冷水域全体の生物生産力は低下するにちがいない。



「紛争の海」再訪：気候変動をめぐる諸問題」

スチュアート ヘンリ氏（放送大学）

10年前に出版された『紛争の海』では、海洋生物資源をめぐる紛争が主題とされた。本発表では極北の民イヌイト社会の現状を中心に、気候変動によって先住民が直面している文化・社会的な変化と葛藤、適応のジレンマの側面を、文化人類学の視点から相対的に論じ、新たに生じている「紛争の海」を多面的に考察した。

極北の先住民がおかれている状況は、決して一様ではない。気候変動に起因する北極海の海水の縮小などの変化に伴い、海底に埋蔵されている天然資源の開発や水産資源をめぐる国家主権の対立、そして先住民の権利に関わるさまざまな課題が生じている。自然環境の「異変」が将来文化的な破壊をもたらすという立場の一方、「異変」を経済的な発展と政治的な自律をもたらすものとして歓迎する立場があり、それらは状況によって異なっているのである。



第2部：海洋環境の変化と先史文化

「先史時代および歴史時代におけるイヌイトの海洋環境変化に対する反応：未来のための意味づけ」

ジェームズ・サベル氏（マッギル大学人類学部）

カナダの極北地域には、最初に古エスキモー集団（およそ4500～800 B.P.）、その後チュール・イヌイト集団（およそ800 B.P.～歴史的接触期）が居住してきた。



これらの社会は、少なくとも生業、技術、社会構造の点で異なっているが、それにもかかわらず、同様の方法で変化する環境に反応していた。具体的には、海氷パターンの性質と広がりの変化は資源利用パターンの変化を伴い、結果的に、広範囲にわたる居住地の放棄やいくつかの地域における再居住を含め、地域の人口統計学的パターンを変化させてきた。本発表では、こうした文化的、人口統計学的変化を概観し、海氷環境が激しく変化しつつある現代におけるこうした変化の意味を考察した。

「千島列島への移住と適応」

手塚 薫氏（北海学園大学人文学部）

千島列島全域を対象とした国際調査によって、オホーツク／続縄文文化とは異なり、アイヌ文化期には中部千島列島における人の居住の断絶状況が確認されている。その理由は未解明だが、気候変動、地震、津波、火山噴火などの千島列島特有の要因や、先史時代における資源確保といった側面を、周辺地域との比較で検討する必要がある。

一方で、外部経済システムへの接合と市場原理が生きる商業漁狩などへの移行なども想定されよう。具体的には、市場における商品価値が高いラッコ皮などの資源を獲得するため、特定の場所に定住し続けるのではなく、遊動性の高い集落形態への移行が見られる。こうした変化はアイヌ文化期になってから先鋭化すると考えられる。



第3部：海獣狩猟民と適応

「シベリアの聖なる海・バイカル湖におけるアザラシ猟：過去・現在・未来」

ロバート・ロージー氏（アルバータ大学人類学部）

バイカル湖では、長い間人とアザラシの相互関係が維持されてきた。本報告では、バイカルアザラシの生態、狩猟に関する考古学的資料、そしてハンターに対するインタビューを概観し、気候変動の影響を検討した。

バイカルアザラシは、その年生まれの仔が氷上で日光浴

を開始する早春におもに狩猟される。考古学的証拠によれば、この狩猟パターンは完新世のほとんどの期間を通じて行われてきた。バイカルアザラシは氷の穴で生まれ、氷上で日光浴や換毛をするため、湖の結氷期の変化は個体群に大きく影響する。一方、薄い氷や解氷の早期化は、アザラシ狩猟のために氷上を移動するハンターにとっても危険をもたらす。地球温暖化は、バイカルアザラシとそれに依存する人々の両者に対し、重大な脅威を提起しているのである。



「生存の条件：オートポイエーシス・システム（自生的なシステム）としてのイヌイトの生業システム」

大村 敬一氏（大阪大学大学院言語文化研究科）

イヌイトはこれまでに二度大規模な社会・文化の変化を経験してきた。一つは500年前の小氷期による変化であり、もう一つは1960年代にカナダ政府によって推進された定住化に伴う変化である。しかし、こうした変化を被りつつも、イヌイト社会は崩壊することなく、生業システムを核に自律的に再生産されてきた。



本発表では、イヌイト社会を支えてきた生業システムが、自律的に再生産するオートポイエティック（自生的）なシステムであることを明らかにした上で、こうしたシステムが今後も稼働しつづける条件として、1) 野生生物へのアクセス、2) 食物の分ち合い、3) 野生生物に対して劣位であること、4) 自由（決定権）確保の4点を提示した。

第4部：海洋における生業活動と適応

「カムチャツカ先住民の海洋資源の利用—チギリ地区南部沿岸における地理的特徴と歴史的变化—」

渡部 裕（北海道立北方民族博物館）

カムチャツカ地方チギリ地区南部沿岸からペンジナ湾にかけてはシロイルカが生息している。特にサケの遡上時には河口域に多くのシロイルカが来遊することが知られ、先住民であるイテリメン、コリヤークの伝統的な狩猟対象となってきた。

本報告ではチギリ地区南部沿岸のイテリメンによる伝統的な海洋資源利用とソ連時代の海獣狩猟の役割に焦点をあて、その地理的特徴、歴史的变化を検討した。1930年代にはイヌ樺の大型化と樺イヌの増加により、シロイルカやアザラシの肉がイヌの飼料などとして盛んに利用されていたが、1950年代後半にはスノーモービルの普及により、そうした利用は激減した。環境とともに政治経済の変化が海洋資源の利用に変化をもたらしたのである。



「アラスカ先住民による漁撈活動と気候変動の関係：ユーコン＝クスコクウィムデルタの事例検討」

久保田 亮氏（大分大学経済学部）

アラスカ州南西部を故地とする先住民チュピックの中には「我々は猟師というよりは漁師だ」と自認する人びとがいる。歴史的に海獣類とサケ科魚類に依存してきた彼らにとって、漁撈は伝統的生業活動の一翼をなす文化的実践なのだ。「地球温暖化」が叫ばれる現在、彼らは環境変化といかなる折り合いをつけつつ、漁撈活動をしているのだろうか。本発表では、アラスカ州南西部にあるチバック村での現地調査に基づき、この点について検討した。

その結果、一部の村人は、降雪や河川氷結時期の遅れ、降雪量の減少といった環境変化を認識していたものの、現時点では人びとの生活実践を大きく変更させるほどの事態には至っていないことが示された。



* * *

最後に、運営委員を代表して、岸上伸啓氏（国立民族学博物館）より、本シンポジウム全体について総括的なコメントをいただきました。

それぞれの発表に対し、他の発表者や運営委員、会場の一般参加者からも質問やコメントが出され、活発な質疑と討論が行われました。

なお、今年度のシンポジウムでは、このほかに運営委員あるいは座長として、吉田睦氏（千葉大学文学部）、手塚薫氏（北海学園大学人文学部）、高倉浩樹氏（東北大学東北アジア研究センター）にご協力いただきました。



会場の様子（シンポジウム2日目）

なお、10月10日（水）18:30～19:30には、シンポジウムの関連事業として、オホーツク・文化交流センターにて「星野道夫 Alaska 星のような物語 思索編（夏～秋）」上映会を開催し、網走市とその周辺地域にお住いの186名の方にご参加いただきました。

（学芸グループ 中田 篤）

講座

フィンランドにおけるサーミ文化の現状と博物館Ⅱ 第二次世界大戦後の新居住地における スコルトサーミの生き方 —1949年から現在まで

2012. 9.18

講師 ヴェイコ=フォードルフ氏
(スコルトサーミ評議会議長)

フィンランドのスコルトサーミ評議会議長のヴェイコ=フォードルフ氏をお迎えし、日本ではあまり知ることのできない、スコルトサーミの歴史と文化について紹介していただきました。通訳は北海道フィンランド協会理事の水本秀明氏にお務めいただきました。

スコルトサーミは現在約700名で、このうち300名ほどがスコルトサーミ語を母語としています。フィンランドには、北サーミ、イナリサーミ、スコルトサーミの三つのグループが暮らしていますが、スコルトサーミがもっとも少数になります。

第二次世界大戦後、それまでスコルトサーミが暮らしていた地域が、ロシア領になったため、イナリ湖の近くに移住しています。ここは最初全くの荒野であったといいます。フィンランド政府は家や学校、ロシア正教会などを作り、その後も整備を続けています。また、文化の維持・促進や特権を定めたスコルトサーミ法も制定されています。

スコルトサーミ文化の継承については、特に言葉が危機的な状況で、「Language Nest 言葉の巣」*をはじめ、さまざまな取り組みがされています。トナカイ飼育にたずさわる若者も少ないが、それでも文化が継承されることについては楽観的に考えていると、明るい言葉で講座をしめくくっていただきました。

*Language Nest こどもにその言語をたくさんあびせ、言語の復興に役立てる取り組み

(学芸グループ 笹倉いる美)



スコルトサーミの伝統的衣装の
フォードルフ氏

講座

地球温暖化とトナカイ牧畜民

2012.9.23

講師 中田 篤 (当館・主任学芸員)

本講座では、地球温暖化がトナカイ牧畜に及ぼす影響について、現地調査の結果を含めて紹介しました。

まず、地球温暖化とは「化石燃料の消費で生ずる二酸化炭素などの温室効果によって、全世界の平均気温が長期的に見て上がっていく現象」(広辞苑第五版)を指します。IPCC(気候変動に関する政府間パネル)という国際組織によって2007年に発表された第4次評価報告書には「気候システムの温暖化には疑う余地がない」と記され、また「気温上昇は特に北半球の高緯度で大きい」とされています。

次に、地球温暖化がトナカイに与える影響について紹介しました。世界的に野生トナカイが減少しているという報告があり、その一因として地球温暖化が挙げられています。具体的には、気温や降水量の変化によって、トナカイの餌となる植物の減少や質の低下が考えられます。また、積雪が増えたり、積雪中に氷層ができたりすると、トナカイが雪の下の餌を食べづらくなります。間接的影響としては、極北地域で資源開発が盛んになると、トナカイの生息環境が破壊される可能性があります。自然の放牧地を利用するトナカイ牧畜もこうした影響を受けると考えられ、トナカイ牧畜民の中にはそれを実感している人びともいます。

最後に、東シベリアのサハ共和国・トンボ郡で行った現地調査について紹介しました。気温や降水量の変化、家畜トナカイ頭数の変化とともに、トナカイ牧畜に従事してきた人びとの気候変動に関する認識を調べた結果、地域の気候が変化していること、変化を感じている人もいるが、それを正常な変化の範囲内と考えていること、現時点ではトナカイ牧畜に大きな悪影響は与えていないことがわかりました。ただ、サハ共和国内でも地域によって状況は異なるようなので、今後はそうした地域差の要因を明らかにしていきたいと考えています。

(学芸グループ 中田 篤)



サハ共和国トンボ郡のトナカイ牧畜の様子

ロビー展

明治大学政治経済学部寄贈資料展

～明治大学アラスカ遠征の記録～

2012.11.1-12.16

今からおよそ50年前の昭和35（1960）年、明治大学は創立80周年記念事業の一つとして、アメリカ合衆国アラスカ州の学術調査を行いました。この調査には、民族学、考古学、地理学の三班が派遣され、アラスカの自然や資源、先住民に関する大きな調査成果がもたらされました。

当館の第二代館長岡田宏明が調査団の一員だった縁から、平成23（2011）年に、民族学班がアラスカで収集した600点以上の資料が明治大学政治経済学部から寄贈されました。

本展示では、寄贈を受けた資料の一部を用いて1960年代のアラスカに暮らす人びとを紹介しました。

予備調査

岡正雄氏（当時明治大学教授）を班長とする民族学班は、極北エスキモーの調査を目的としていましたが、予備調査として、まずアラスカ南東部など北西海岸インディアンが居住する地域を訪れ、聴き取り調査を行っています。

本展の最初の部分では、民族学班がこれらの地域で収集した、トーテムポールの模型やオオツノヒツジ製のスプーンなどを展示しました。

アラスカのエスキモー

アラスカのエスキモーのうち民族学班が調査したのは、極北地帯のエスキモーで、このグループには海岸部の集団（タレウミウト）と内陸部の集団（ヌナミウト）があります。

民族学班はタレウミウトの調査のために、シシュマーレフ、ポイント・ホープ、ポイント・バローを訪れ、ヌナミウトの調査のために、アナクトブク・パスを訪れました。

シシュマーレフ

シシュマーレフの人口は昭和35（1960）年、当時170人ほどで、アザラシ猟や鳥猟、漁労に依存していました。すでに交易所や教会、郵便局はありましたが、伝統的な生活がよく維持されていました。シシュマーレフのコーナーでは、伝統的な海獣狩猟具や漁労具、牙製の人形などを展示しました。

ポイント・ホープ

ポイント・ホープの当時の人口は260名ほどでした。この村はクジラ狩猟文化の中心地であり、親方と子方の関係で結ばれた13のクジラ組が存在していました。春はクジラ猟を、秋から春にかけてはカリブーやセイウチ、アザラシの狩猟もしていました。ポイント・ホープには多くの遺跡があり、少なくとも2000年はさかのぼることができます。



●は民族学班訪問地

このコーナーでは、民族学班が収集した考古学的な遺物を中心に展示しました。

ポイント・バロー

ポイント・バローもポイント・ホープ同様、クジラ狩猟文化の中心地でした。しかし、20世紀に入り、白人の捕鯨基地や学校の設置、第二次世界大戦後にはアメリカ海軍のレーダー基地などが建設されたことで、当時の人口は2000人規模になっていました。

民族学班は、ポイント・バロー村が極北エスキモーのなかでもっとも文化変容の激しい町として報告しています。このコーナーでは、伝統的な生活道具とともに、他の村とは家の造りなどが違う当時の写真を展示しました。

アナクトブク・パス

ヌナミウトは、20世紀初頭に突如として多くが海岸部へと移動したと思われていました。しかし、1941年に内陸部に不時着したパイロットが偶然にヌナミウトに出会ったことから再度その存在が知られるようになりました。

カリブーを追って移動生活を行っていたヌナミウトは、不時着したパイロットの説得により、定住的な生活を行うことになりました。アナクトブク・パス村の誕生です。

定住することで、ヌナミウトは飛行機が運ぶ物資の提供を受けることができ、また学校も設置されたので、教育も受けることができるようになりました。そして、昭和35（1960）年当時は人口93人の村になっていました。

このコーナーでは伝統的な狩猟具や、1950年代に土産物として作られはじめた革製の仮面などを展示しました。

民族学班は、伝統文化の存続や急速な変容など、当時アラスカ先住民が置かれていたさまざまな状況を調査・記録しました。特に内陸エスキモーの伝統文化を記録できたことは、大きな収穫と言えます。

アラスカでの調査は、当館第二代館長岡田宏明、現館長岡田淳子に引き継がれ、アラスカ半島の発掘や、南西アラスカでの聞き取り調査などが行われました。明治大学での調査と岡田両氏によってなされた調査成果は、現在でも、日本はもちろんアラスカでも高い評価を受けています。

最後にこれらの資料をご寄贈くださった明治大学政治経済学部にご感謝申し上げます。

（学芸グループ 角 達之助）

講座

日本人によるアラスカ発掘映像の記録

2012.11.4

講師 岡田 淳子（当館・館長）

ロビー展に関連して、当館館長岡田淳子がアラスカでの発掘調査の様子を、デジタル映像をもとに紹介しました。岡田淳子は、岡田宏明（当館第二代館長）らとともに、昭和35（1960）年の明治大学創立80周年記念行事で考古学班が発掘した遺跡調査の後を受け継いで、ポートモラー・ホットスプリング遺跡の発掘を行いました。本講座で紹介したデジタル映像は、発掘に参加した隊員たちが1年がかりで作ったものです。

遺跡はアラスカ半島ポート・モラー湾入り口の台地上にあります。台地の間の谷から温泉がわき出ており、「ホットスプリング」の名はここからきています。

岡田は、隊員と共に遺跡全体の測量を行った後、地表面の丸い窪み8か所を発掘し、これらが竪穴住居跡であったことを報告しました。また、測量によって確認できた252か所の窪みのほとんども竪穴住居跡だとし、この遺跡が大集落であったと結論付けています。

竪穴住居跡は大小さまざまで、大きいものは直径10m以上で共同住居だと判断しています。またどの住居跡も脂を燃すための石皿や据付粘土容器をもっていたといえます。

住居跡の他に貝塚の説明もありました。4000年前から600年前までの貝層が、2回の寒冷期をはさんで続いており、古い方からポート・モラーⅠ・Ⅱ・Ⅲと名付け、各層の堆積状況から当時の環境を復元しています。Ⅰ・Ⅱ層は岩礫性の貝が多く、Ⅲは砂泥性の二枚貝のみで、Ⅱ層とⅢ層の間の寒冷期には津波の影響があったと想定しています。また、Ⅰ・Ⅱ層中からも地表面には見えない住居跡が多数発見されており、Ⅰ層で住居跡の上にシロイルカの頭骨と6人の埋葬骨、Ⅱ層では、祭祀関連の遺構があったと報告しました。

(学芸グループ 角 達之助)



報告する岡田館長

調査報告

2012年度カムチャツカ調査
シロイルカがやって来る村

2012.8.6-8.28

調査者 渡部 裕（当館・学芸員）

カムチャツカの先住民文化は北海道、サハリン、千島列島の先住民文化と共通する要素が多く、これらの共通性をもたらす要因は、環境や生物資源が類似する北太平洋西部ないしはオホーツク海に面しているからと考えられ、日本列島北部の基層文化を検討する上でこれら共通要素の検討が求められてきました。

筆者はこうした観点からカムチャツカの先住民文化について現地調査を行ってきました。11回目となる本年8月の現地調査の主な目的は、北部オホーツク海に面するカムチャツカ西海岸チギリ地区南部の先住民であるイテリメンの海洋資源の歴史的变化を把握することです。オホーツク海には季節的に海水が発達し、さまざまな海獣類が生息していますが、沿岸の人びとはそれら海獣類を狩猟する文化を発達させてきました。カムチャツカのオホーツク海北部沿岸にはアザラシ類とともにシロイルカが生息していて、コリヤークやイテリメンの重要な食料となってきました。チギリ地区南部の村ウスチ・ハイリュゾヴォはハイリュゾヴォ川の河口にあり、サケの遡上時期にはサケの群を追って川に入って来るシロイルカを間近で見ることができます。



広いハイリュゾヴォ川河口に来遊したアザラシ(黒い点)とシロイルカ(右端) (2012年8月撮影)

かつてこの地のイテリメンはシロイルカを人の食料や橈イヌの餌としてきました。各戸で橈イヌを10頭前後飼育していましたが、スノーモービルの出現とともに橈イヌの頭数も大きく減少し、現在ではシロイルカの狩猟はほとんど行われなくなっています。そのため、河口の水面には人を恐れない多くのシロイルカとアザラシをみることができました。

(学芸グループ 渡部 裕)

ロビー展【観覧無料】**山口未花子写真展****カスカ～カナダ・ユーコンの森の狩猟民**

平成25年1月8日(火)～1月27日(日) 当館ロビー



ヘラジカの干し肉を作る古老

関連事業

1月20日(日)
10:00～11:00
展示解説会

13:30～15:30
講習会

「カナダの狩猟民カスカの
ビーズ刺繍ブローチ」

講師 山口未花子氏
(東北大学)

企画展【観覧無料】**アイヌ語地名を歩く****山田秀三の地名研究から2013・冬
網走／オホーツク**平成25年2月2日(土)～4月7日(日) 当館ロビー
北海道立アイヌ民族文化研究センター 共催**関連事業**

2月2日(土) 13:30～15:00 展示解説会

2月9日(土) 13:30～15:30

講演会「アイヌ文化と『環境』」

講師 本田優子氏(札幌大学) ほか

2月16日(土) 13:30～15:30

講座「アイヌ語地名研究と山田秀三」

講師 伊藤せいち氏

(当館研究協力員) ほか

INFORMATION**移動展**

◆10月13日(土)～12月9日(日)、神奈川県立地球市民かながわプラザ・あーすぶらざ(横浜市)で開催された企画展「北を彩る小物たち 北方民族の暮らしとデザイン」にて、帽子、手袋、バッグ、履物など当館の所蔵資料66点が紹介されました。

また、移動写真展「北に暮らす子どもたち」も同時開催されました。この写真展は、開館20周年記念事業として当館で平成23年に企画・展示しました。その後、札幌市・仙台市・富山市を巡回し、今回の横浜市で5回目の開催となりました。

行事報告

◆10月26日(土)、講座「国立サハ・フィルム社 特別上映会」を開催しました。ロシア・サハ共和国からS. ドゥルー=シフツェフ氏(国立サハ・フィルム社社長)、P. シフツェフ=マクシーモワ氏(北東連邦大学教授)をお迎えし、同社制作映画のダイジェスト版を解説付きで鑑賞したあと、サハの文化についてお話しいただきました。

◆10月26日(土)、はくぶつかんクラブ「サケ料理～サケバーガー作り」(講師：菅原章子解説員・永瀬早苗解説員)を開催しました。

◆11月3日(土・祝)、「第4回はくぶつかんまつり」を開催しました。当日は、22名のボランティアが運営にご協力くださいました。あいにく風雨の混じる天候でしたが、この日は午後2時までに約440名の方にお越しいただきました。

屋外でのカムチャツカ風サケ鍋の無料提供、ペリメニやくじら串などの販売、縄投げなどのゲーム、ミニコンサート、屋内での衣装体験やクイズなど、さまざまなイベントをお楽しみいただきました。



◆11月10日(土)、講座「能取岬西岸遺跡～発掘調査中間報告」(講師：角達之助学芸員)を開催しました。

◆11月17日(土)、はくぶつかんクラブ「カラフル勾玉作り」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。

◆11月17日(土)、大空町立女満別小学校の学芸会における4年生の総合劇で、当館の貸出したトンコリの演奏が披露されました。



◆11月23日(金・祝)、網走市オホーツク・文化交流センターで開催された「あばしりまなび塾フェスティバル」(同実行委員会主催)にて「切り絵でクリスマスのオーナメントづくり」を行いました。

◆11月24日(土)・25日(日)、講習会「とんぼ玉づくり」(講師：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

北方民族博物館だより

No. 87

平成24(2012)年12月21日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org

指定管理者

財団法人北方文化振興協会